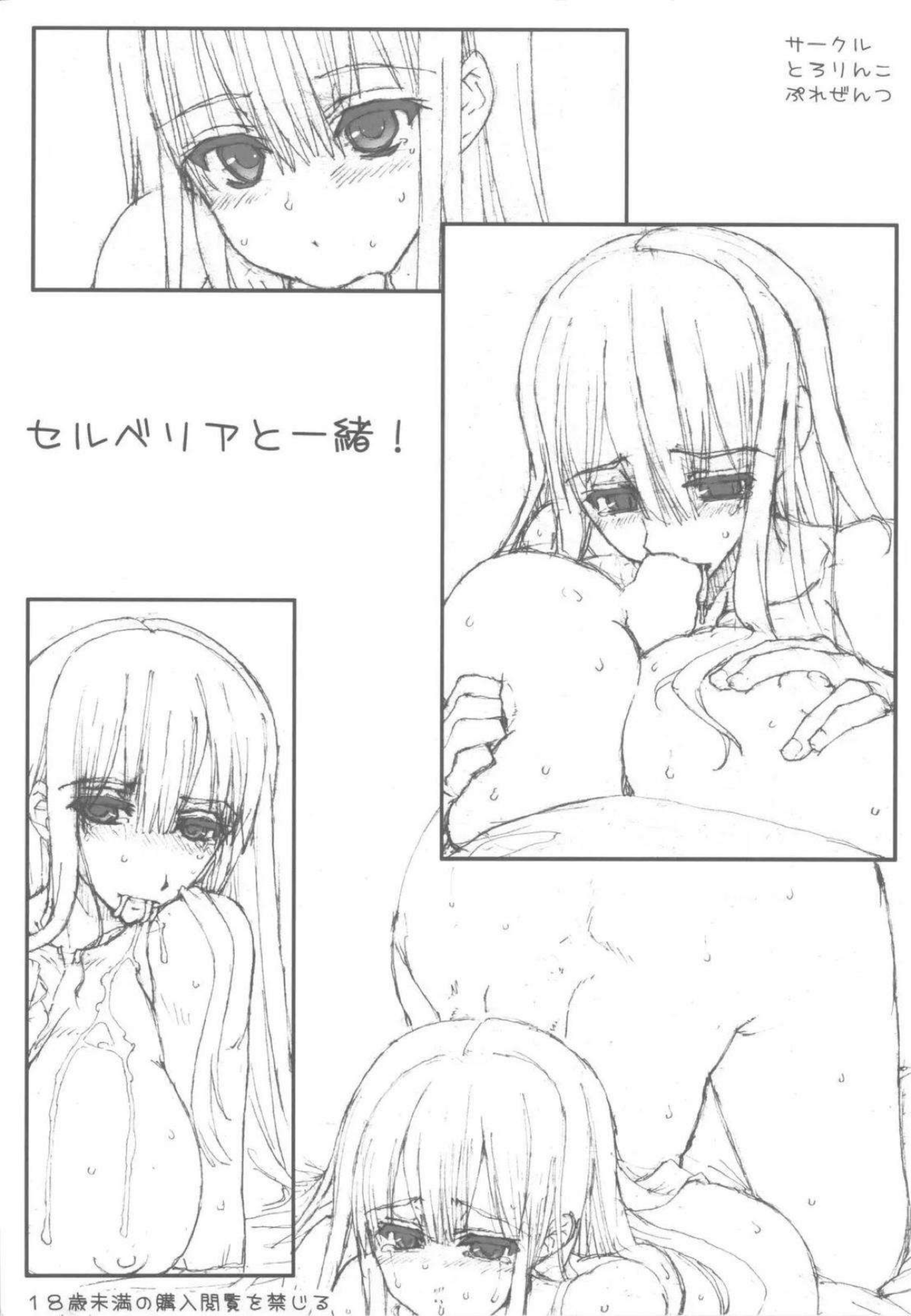
サークル
とろりんこ
ぷれぜんつ

セルベリアと一緒！



１８歳未満の購入閲覧を禁じる

『こんな所に連れてきて、何をするつもりだ？』

男がセルベリアを兵舎の自室に連れ込むと
彼女はじとっと、にらみつけてきてそう言った

『…まだ、勤務時間なのだからな…』

そういいながらも、
セルベリアの顔はちょっと紅潮してる

無理もない、
セルベリアは定刻軍の中でもとびぬけて可愛く
また巨乳であったにも関わらず、
凶☆暴でおつかないのが災いして処女をこじらせてきていた

その処女を男がちょっと強引にごちそうになったのが先月、
そして、この間ようやくイクことの味を覚えさせたばかり
今のセルベリアはまさに盛りのついた雌猫なのだ

塗りなれていない
ピンク色の口紅が
ついたツヤツヤのくちびる
男はそれを乱暴に奪った
『んっ〜〜っ』
一瞬、セルベリアの体が
硬くなる、
手が男をおしのけようと
肩に乗る
だがそれは
おくゆかしい女の子の
照れ隠しなのだ…
兵舎に人の気配が
無いとわかると
セルベリアは
すぐに彼女の方から
舌をからめてきた
『ん…ちゅ…♥』
セルベリアのベロが
男の口の中に入り
しばし、部屋一杯に
汁気のある音がずるずると鳴り響く、
それが今日はじめての
セルベリアと男の体液の交換だった

『わっ…もう、こんなのか…っ』

キンキンに硬くなったペニスの
先を服越しに乳首にこすりつけられ
セルベリアは上ずった、
すこし…脅えた声をあげた

しかし、さっきペニスに噛み付かれた
乳首はビンビンに勃起していた

これが自分の初めてを
奪ったイチモツなのだ…
自分のもっ一番柔らかい女の部分を
突き破って、
自分を大人にしてくれたものでもある

男を自分の体の中に迎えるため
服を一枚ずっ脱ぎながら
男にいわれ、ペニスをゆっくりと
しごきあげるセルベリアは
初めて陽のあたる場所で見るペニスが
少し…怖かった

セルベリアが
とうとう一糸まとわぬ姿になると
男はもうたまらなかった
帝国一の美女を昼間から
全裸にさせ抱こうとしているのだ
生まれたままの玉の肌を見られ
真っ赤になったセルベリアが
申し訳程度にギンタマを
揉むのもたまらなかった
男が遠慮無しに
セルベリアの体に吐精し
べとっと黄色いザーメンが
肌を汚す
セルベリアは泣きそうな顔で
ペニスが二度三度、
液を吐くのを見てから
観念したように口をあけた
『きゃ…あ』
ウブ女の声が
軍人の娘の口からもれる
『んあ…』
射精するたびに
しゃぶって綺麗にする
それが男の『しつけ』だった

『かぷっ…ん…』

手でシコって出すときも
視姦に慣れきった巨乳でのパイズリでも
男が腰を痙攣させ
たっぷりザーメンを吐き出した後は
必ずセルベリアが
そのぷっくりした口で
ペニスをしゃぶり、吸って、洗う
そうして、
男の味を覚えさせられていくのだ…

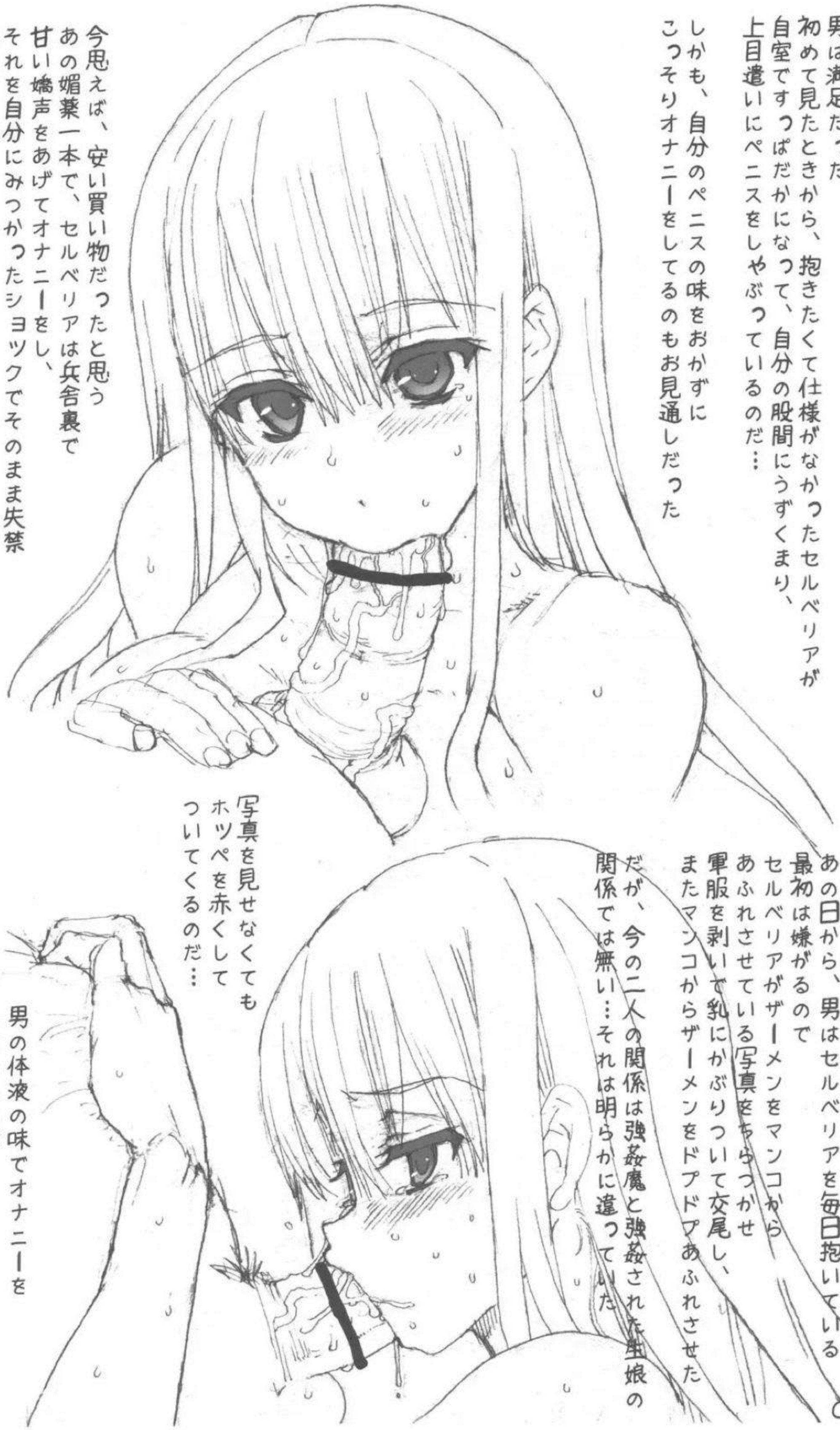
だから、セルベリアはまんこの中よりも
口の中にペニスを含んでいた回数の方が…多い
最初のうちセルベリアは、
男のペニスの汗や尿のまじった精液の味に
吐き気すらもよおしていた、のだが、

…今ではフェロモンの塊にしか見えないのか…
しゃぶりながら自分でも無意識に
股の間の割れ目を指でなぞり
ひっかくように愛液の汁壷をこじ開いて
ぴちゃぴちゃといやらしい音を立てていた

男は満足だった
初めて見たときから、抱きたくて仕様がなかったセルベリアが
自室ですっぱだかになって、自分の股間にうずくまり、
上目遣いにペニスをしゃぶっているのだ…

しかも、自分のペニスの味をおかずに
こっそりオナニーをしてるのもお見通しだった

今思えば、安い買い物だったと思う
あの媚薬一本で、セルベリアは兵舎裏で
甘い嬌声をあげてオナニーをし、
それを自分にみつかったショックでそのまま失禁
制服をションベンまみれにしてしまい
それを口実に、自室に連れ込み、そして、
媚薬の効いた体をおさえつけ、美女の処女を堪能したのだ…



あの日から、男はセルベリアを毎日抱いている
最初は嫌がるので
セルベリアがザーメンをマンコから
あふれさせている写真をちらつかせ
軍服を剥いで乳にかぶりついて交尾し、
またマンコからザーメンをドプドプあふれさせた

だが、今の二人の関係は強姦魔と強姦された生娘の
関係では無い…それは明らかに違っていた

写真を見せなくても
ホッペを赤くして
ついてくるのだ…

男の体液の味でオナニーを
しているのだ…

最初はベソをかいてやろうともしなかった
イラマチオも今ではあっさりだ

「ン……♥……ング……ウン♥」

セルベリアは耳まで赤く染めてしっかりと
ペニスをその柔らかい口で掴み、吸う
歯は立てないで、裏筋をベロはいつも嘗め回す
のどちんこは鈴口を撫でるために作られたと思うくらい
男はセルベリアののどの柔突起にペニスの先端をフレンチキスさせる
それでも、セルベリアは大好きな男の、
大好きなちんこをしゃぶるのはやめない♥

口の中で少しでもチンコが
喜ぶ場所があるなら掘っていこうとする
男の動きはまさにセルベリアをレイプした
レイプ魔そのものだ……

最後にはその本性丸出しに、
顔をオナホ代わりにして、
男は最後には陰毛に美女の鼻水と
ヨダレをまとわらせて
喉奥に、射精する

「…ごくん、…ごく、…ん」
セルベリアはザーメンを飲みながら思う

(勝手な男…ほんと、駄目な奴)
その男に抱かれて喜ぶ自分は
たぶん、もっと駄目な女なんだろう
田舎者の下級兵の劣化遺伝子に
処女を奪われた自分が恥ずかしい
でも、セルベリアは男のことを好いていた

マクシミリアン以外に
こんなにも
自分を求めてくれた人は
いない、まして自分の体も心も
欲しがってくれるのは男だけだ
正直、嬉しい

それにセックスが終わった後
抱かれて火照った裸体を
冷すために男によりそい
絡み付いて一緒に話す
ピロートークは
意外と楽しかった

だから…
こんなこともしてしまう
最初は胸が痛いだけだったパイズリも、
今では男にもみこまれりつぱなマシヨマロオツパイになり
極上のパイズリ用の乳房になりさがつていた

「こ…こうか？」
パイズリながらベロを突き出し
しやぶれという男の命令
セルベリアは犬のように素直にしたがう

最近は軍服の上からでもオツパイが柔らかすぎて
歩くだけでたぷたぷと揺れ
上官たちですら股間を膨らましている
多分、オツパイが柔らかくなつたのが
パイズリのせいであるのもばれてるだろう
「…もう、恥ずかしすぎる…」

本日、三度目の射精はまた口から
セルベリアの胃袋へ…

『ん…ごく…ん…』

3回目でもコテコテの濃い精液…
こんなものを飲み干せば
げっぷが出るたび、ザーメン臭いだろう
…先週の定例報告の際、
マクシミリアンの前で
そのザーメンげっぷがでてしまった
そのときの彼の侮蔑の顔に、
セルベリアは思わず濡れてしまう駄目ぶりだった

「んっぷぅ…♥」
甘え声と一緒に口の奥から亀頭がでてくるとそれは粘液でねばあ～と糸を引いてペニスを奇麗にするどころかねとねとにしていた。
だが、これでいいのだ…セルベリアは染めていた顔をより一層真っ赤にして腰を落とすとゆっくり、肉を震わせながらはしたない角度まで股を広げた…むっちりとした太ももの間で、ピンクのマンコが…粘糸で粘っていた
―ねばねばのペニスとねばねばのヴァギナ二つがであえば、することは一つだ
「……だ、……抱いて…」
…初めて、男に抱いてくれと乞うてしまった
「…抱いてください♥」
一度言ったら二度目は簡単だった♥
ぱっくり…

ツンと突き出した大きな尻
そこに手をかけ
自分の肉棒をずぶずぶずぶ…
と沈めていく

その相手は無防備な首と背中を晒して
ふんわりした大きな双乳を脇にはみ出し
こっちを振り返り
切なそうに見つめている

『先っぽだけじゃだめ…全部入れて♥』

たがの外れたセルベリアは
可愛エロモードで奥への挿入をねだってくる

ドキ♡
ドキ♡
ドキ♡

男は今日が
セルベリアの
危険日なのを
知っている…

セルベリアも
もちろんしっている

ヒトゴ

ハァ…

ハァ…

ハァ…

ゴムはある、
でも男は最初から、
セルベリアを手篭めにし
処女を奪ったときから
一回もゴムを使ってない

ずず

ず

みちみち

なぜなら、男はセルベリアを妊娠させ
結婚して自分の女にしたいからである

ーそして、セルベリアもそれを望んでいる
ぶる
ぶる
ハァ…♡
ハァ…♡
ハァ…♡
ぐぅ…
ぐぅぅぅ…
ぐっぐっ
びくん
ずぶ
ずぶ
ずぶ
ずぶ
ずぶ
ずぶ

孕むための射精
ぎゅ…
4回目の射精は
膣の中だった…
どぴゅ どぴゅ
どぴゅ
どぴゅ
どぴゅ どぴゅぷぷぷ…♡
超のつく危険日にザーメンを出された
セルベリアはもう観念しきってイキまくり
どぴゅ…
どぴゅ♡
ぜぇ…♡♡
ボト
ボタ
ボタ
ハァ…♡
ちら
ピロートークの間、
ずっと潤んだ目で
男を、君を見ていたのだった
『ちゃあんと責任とるんだぞ』
『…結婚してやるから♥』

十月十日後…

みごとなボテボテのおなかになり
退官したセルベリアさんは
ゲームとは違う未来を歩んで
ヴァルキュリア王国再建を目ざすのでした
めでたしめでたし

奥付
誌名：セルベリアと一緒！
著者：とろり
発行：とろりんこ
印刷：緑陽社
初版発行年月日：２０１０年０４月２９日